

## 生田緑地自然環境保全会議ニュースレター

## ■議事概要

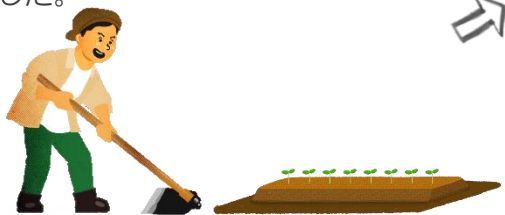
◇日時：令和5年1月16日（月） ◇場所：市民活動室 ◇参加：11名  
◇議題：『目標とする自然』についての連続した話し合い 第2回  
～これから生田緑地の自然とどう向き合っていくべきか～

## 『目標とする自然』についての方向性

第1回話し合いで出た内容（R4第4回ニュースレター参照）を基に会員同士が意見交換を行い、以下のような方向性が示されました。

里山が持続可能であったのは、農家が利用してきたからです。その里山を公園にしたら、農家の利用にあたる人為を投入しなければ、樹木は大きく育ち、本来の雑木林とは違った生態系になります。その例がナラ枯れです。

では、本来の雑木林の生態系を維持するために必要な管理費はどの位なのでしょう？八王子市にある都立公園（多摩丘陵）で概算すると、公園になってからの雑木林の管理に掛けられる費用は、必要量の10分の1ということがわかりました。



そこで、農家に代わるような利用、すなわち、「かしこく使う」ことで雑木林が持続的になるような生田緑地の運営が求められます。

それは、利用と管理作業が一体となったプログラムを企業等の対象団体毎にカスタマイズして用意し、団体から適切な費用を得ること等が考えられます。

例：芝公園をフィールドに、NEC本社社員が昼休みにアサギマダラ（蝶）を呼ぼうとしているボランティア活動が参考になります。

また、そこには博士の学位を持った専門家の関与も必要です。

例：十日町市立里山科学館（愛称：キョロロ。）の小林氏が参考にされます。

これは都市公園という主に税金で成り立ってきた場を大きく変えるものになるはず。これまでのように税金に依存しているだけではなく、生田緑地の自然を保全することを通じて、費用を稼ぐ新しいタイプの公園の運営をめざしてみよう。



# 自然会議の在り方・進め方について 各意見

前頁の方向性に付随した意見や、その他 以下のような提案事項が挙がりました。

## 協働活動をグループ分けしてはどうだろう？

現在の自然会議の会員は、ごく限られたメンバーによる運営となっており、第1回で話し合った取り組みを進めることが難しい現状です。マネジメント会議等とも連携し協働活動を進める上で具体的な仕組み案が出されました。

第1回話し合いで出た 「保全とは、『保護』と『利用』を内包したもの」という概念を基に『保護』と『利用』が一体となる管理をグループに分けて展開していく案です。

『目標とする自然』を学術的に考えるグループ  
『保護』と『利用』に関わる、稼ぐプログラムを企画するグループ  
プログラムを実働に落とし込むグループ

## 市民も参加できる

### 現地会議をしよう

これまで自然会議が行ってきた植生管理計画の検討は、会議室での協議が多いものでした。今後の課題となる雑木林の再生については市民の力が不可欠であるため、植生管理について市民にわかりやすく理解・参加できる場をつくる案です。

「植生管理を考える観察会」なども検討し、人手が入った管理の大切さの認知普及を目指すものです。

## 年報報告物で 振り返るのはどう？

自然会議で活動した内容を取り上げた報告物を年度終わりに発信する案です。作成する過程で1年を振り返り、同時に市民へ発信し、生田緑地の自然の魅力普及に繋がります。

## シンポジウム

### を開催したい

魅力普及の一環、生田緑地の自然について市民に広く知ってもらう機会を設ける案です。

## 宙とみどりの科学館との

### 連携を深めるべきでは？

生田緑地の自然について今後話し合っていく上で、現在自然会議の会員として参加している宙とみどりの科学館に、今以上に学術的な面も含め関わっていただくことが重要だという意見がありました。

## 若者が集う枠組みが大切だ

前述したように、現在の自然会議メンバーが限定的であることが課題となる中で、各団体の枠を超えて、若手に絞ってお互いが情報を共有する場が必要だという意見が出ました。

